

滋賀KANAMEプロジェクト事業 特別寄稿 変化に開かれた「わたし」への気づき

関西学院大学人間福祉学部
専任講師 川中大輔



「あなたは何者か」と問われれば、あなたはどのように答えるでしょうか。居住地や出身地、職業や所属している組織／団体、性別や世代などを用いて答えるかもしれません。このように属性によって自己を表現することは、自己紹介の場面で日常的に見られることです。属性の類似性から親近感が湧き起こって会話が弾むこともすくなくありません。しかし、属性による自己表現は、固定的な自己理解に通じる可能性があります。多くの属性は頻繁に大きな変化を見せないからです。犯罪を犯したことのあつた人々であれば、周囲から差別的な烙印を押されて、そのまなざしからなかなか自由になれないこともあるでしょう。

それでは、「あなたは何者か」との問いへの答え方は属性以外でどのようなものがあるでしょうか。人類学者のティム・インゴルドは『人類学とは何か』（亜紀書房、2020年）の中で「私たちが誰であるかは、集合的な生のもちつもたれつの中で、どこに自分たち自身を見いだすのかということの指標である」（前掲書59頁）と述べています。確かに私たちは集団の中で他者との差異性から「自分はあの人よりこういう強み／弱みがある。だから、自分はこういう役割を担う者である」と自己を同定しています。また、他者から「わたし」という存在を大切にされたり必要とされたりする中で、「〇〇から愛されている者」といった自己理解も芽生えていくこととなります。こうした関係論的なアイデンティティ（自己同一

性）は、関わる他者や属する共同体によって変化するもので、流動的な自己理解へとつながっていきます。この変化への開かれに私たちは可能性を見だし、更生保護の実践にあたっているのではないのでしょうか。例えば、非行集団の中にいた際の自己と異なる自己が新たな共同体の中で浮き上がってくる時、その人の新たな生活／人生への希望が紡がれていくことを実感していることでしょうか。

だからこそ、更生保護の現場では、どのような他者との出会いや交わりの場を整えていくのか、どのような共同体に招き入れていくのかが問われることになります。一人ひとりの「いま」を知り、一人ひとりの求めに適合する関係性を息長く創りあげていく営みは当然ながら容易なものではありません。それ故に滋賀県更生保護事業協会が休眠預金活用事業として進めている「地域のKANAMEネットワークの育成と重層的支援体制構築による息の長い支援事業（滋賀のKANAMEプロジェクト）」では、組織としてのネットワークに厚みを持たせ、組織として励まし合い助け合い、組織として実践知を共有／創造してきているのだと考えています。同事業の最終年度を迎える中、こうして関係論的アイデンティティの観点から改めて何を／なぜ目指しているのかを踏み固めることで、次の展開での跳躍につながるのではないのでしょうか。



研修会風景（5月20日 キラリエ草津）

滋賀KANAME
プロジェクト事業
2025年度事業始まる!!



国の休眠預金活用事業の助成を受け2023年度から取組を進めている「滋賀KANAMEプロジェクト事業」は、いよいよ3年目となる最終年を迎えました。

事業の締めくくりに向け、県下各保護区のKANAMEネットワーク（地域連携担当者）を中心に事業に取り組んでまいります。（滋賀県更生保護事業協会）